

ソクラテスと道德教育  
——プラトン対話篇『ソクラテスの弁明』『ラケス』を中心に

坂本知宏\*

**Socrates on moral education in *Apology of Socrates and Laches***

SAKAMOTO Tomohiro

**Abstract**

Moral education is one of main concerns of Socrates. He denies he is a teacher because he knows that he does not know what is virtue — his famous disavowal of knowledge. But in a sense he is a great teacher. But in what sense? And what ideas does he have about education in the first place? Anything helpful for us to think about modern moral education? In this paper I examine his thought about moral education in Plato's dialogues *Apology of Socrates* and *Laches*. In chapter 1 I discuss problems of moral education on the basis of *Apology of Socrates* 19d-20c, in chapter 2, qualification of educator on the basis of *Laches* 184e-187a, in chapter 3, the impact of his disavowal of knowledge on education and inquiry. In the last chapter I consider his method of moral education.

**はじめに**

小論は、プラトンの『ラケス』と『ソクラテスの弁明』（以下、『弁明』とする）を題材に、以下のような問いを扱う。ソクラテスの関心は、もっぱら道德教育にあったと言えるが、ソクラテスは教育、特に道德教育についてどのような考えを持っていたか。ソクラテス自身は教師であることを否定するが、彼が偉大な教師であると認められてきたことも確かである。これはいかなる事態なのか。また、現代の道德教育に資することをソクラテスは述べたか。述べたとしたら、それはどのようなものか<sup>1</sup>。

---

\* 大阪電気通信大学 人間科学研究センター

## 第1章 『弁明』 19d-20c における道徳教育の諸問題

### (1) 『弁明』 19d-20c

ソクラテスは『弁明』 19d-20c において、自分への訴えの後半部分、すなわち人間たち（若者たち）を教える試みをなし、お金を儲けていることを、否定する。ただし、ソフィストたちのように教育できることはよいことだと述べる（19e）。当時、エウエノスというソフィスト、「知者 sophos」を裕福なアテナイ人カリアスが息子たちのために雇っていた。そのカリアスにソクラテスが問いかけた時の対話を、陪審員たちにソクラテスは伝える。この対話のうちに、道徳教育の基本的な諸問題を幾つか見て取ることができる。20a-c を引用する。

カリアスよ、とわたしは言ったのです。もし君の息子がかりに仔馬や仔牛であったとするならば、彼らのために監督者となるものを見つけ出して、これに報酬を払って、息子たちを、しかるべき徳をそなえた、立派な者にしてもらうことができるだろう。またそういう監督者は、誰か馬事や農事に明るい者のうちに見つけることができただろう。しかし現実には、君の息子は人間なのだから、どういう者を、彼らの監督者として取るつもりで、君はいるのかね。誰かそういうふうな、人間として、また国家社会（ポリス）の市民としてもつべき徳を、知っている者があるだろうか。つまり君は、息子さんをもっているのだから、こういうことを、もう考えていると思うのだね。どうだろう、誰かあるかしら、それとも、ないだろうか、こうわたしが言ったら、あるとも、大ありだと、かれは答えたのです。それは誰だ、とわたしは言いました。そしてどこの者だ、またいくら出せば、教えてくれるのだとも聞きました。そうすると、エウエノスというのだ、ソクラテス、パロスの者で、報酬は五ムナだ、と言いました。そこでわたしは、そのエウエノスを、本当にそういう技術の心得があって、そのようなころあいの値段で、教えているのなら、それは羨ましいくらいの人だと言ってやりました。実際、とにかく、もしわたしが、そういう知識をもっているのだとしたら、自分でも、それを<sup>は</sup>栄えあることとして、さぞ得意になったことでしょうからね。しかし間違わないでください。わたしはそういう知識を、もってはいないので、アテナイ人諸君<sup>2</sup>。

教育に関連して、ここで扱われているのは、(1)教育そのもの、教育の目的（「しかるべき徳をそなえた、立派な者にしてもらうこと」）、(2)教育内容（「人間として、また一国の市民としてもつべき徳」）、(3)教育者の資格（知識、技術を持っていること。「そういうふうな、人間として、また一国の市民としてもつべき徳を、知っている者」）、(4)不知の自覚（「知識を、もってはいない」）、などだ。それぞれを簡単に見てゆこう。

### (2) 『弁明』 19d-20c における教育の諸問題

(1)教育とは何か。若者を、しかるべき徳をそなえた、立派な者にすること、である。ソクラテスの場合、教育、パイディアはもっぱら魂の世話であり、「魂をよりよくすること」である。これが意味するのは、広く、道徳教育であると言える<sup>3</sup>。だが、「教える」という動詞は「～～について」が補われないままでは、その意味を完成させない。では、

(2)何を教えるのか。「人間として、また一国の市民としてもつべき徳」と言われているように、徳を、である。だが「人間として、また一国の市民としてもつべき徳」とは何か。そして教える者は、教えるからには、教育内容を知っているはずだから、

(3)徳を教育する者は、徳を知っているものでなければならない。彼は家畜の監督者に喩えられ、技術の心得のある者、知っている人であることになる。だがその知っているべき徳が何なのか、徳を知っているとはどういうことなのかは依然として問題である。また、ソクラテスは、自分は知らないから教えることができない、と述べ、教えることができる者は、徳を知っているはずだ、と考える。知らないことは教えることができないから、徳を教えるなら、それを知っていることになる、というわけだ。だがソクラテスは徳を知らないと言う。すなわち、

(4)彼の不知の自覚（無知の知）である<sup>4,5</sup>。

なお、この箇所であげられていないものとして、  
(5) どのように教えるか、という道徳教育の方法の問題もある。

以下、2章で(3)教育者の条件を、3章で(4)不知の自覚の教育的意義を、4章で(5)道徳教育の方法を扱う。

## 第2章 教育者の資格：『ラケス』184e-187a

### (1) 『ラケス』184e-187a

以下、『ラケス』184e-187aにランニング・コメンタリーのようなかたちで註解を加えながら、この箇所での教育についてのソクラテスの見解を見てゆこう。

リュシマコスとメレシアスは、二人とも有名な父を持つが、自分たちは社会で活躍しなかった父親たちであり、それぞれ息子をよく教育しなければならないと考えている。ラケスとニキアスは、二人とも社会的に活躍中の有名な将軍であり、リュシマコスとメレシアスによって教育について相談のために招かれている。だが、重装武闘術を若者たちが学ぶべきか否かという問題について二人の将軍は意見を異にしてしまう。そこでリュシマコスはソクラテスの意見を求めるが、ソクラテスは次のように言う。

ソクラテス なんですって、リュシマコスさん。どちらでも我々のうちのより多くの者が賞賛するほうを、あなたは採用されようとしているのですか。

リュシマコス だってソクラテス、ほかにどういうふうにすることができましょう。

ソクラテス メレシアスさん、あなたもまたそのようにされますか。ご子息の体育について彼が何を練習すべきか、あなたが思案されている場合にもまた、我々のうちのより多くの者に従われるのでしょうか、それともまさにすぐれた体育教師のもとで教育され、訓練を積んだ人に従われるのでしょうか。

メレシアス そっちの人に従うほうが適切でしょうね、ソクラテス。

ソクラテス とすると、我々四人よりもむしろその人に従われるのですね。

メレシアス おそらく。

ソクラテス というのは、私が思うに、賢明な判断が下されなければならないことについては、人数の多さによってではなく、知識によって判断されなければならないからです。

リュシマコスもメレシアスも、教育が重要なことは自らの苦い経験から、よくわかっている。彼らがわかっているのは、教育がいかに困難な企てであるかということだ。つまり、彼らは、人々から尊敬される将軍二人を招き自分たちの息子たちの教育について相談する。だから彼らは教育の重要性は認めている。(ソクラテスが繰り返し教育の重要性を述べる時、彼らも将軍二人もそれを否定しない。)しかし彼らは、二人の将軍たちが若者が何を学ぶべきかについて意見を異にした時、さらなる意見を求めてソクラテスを、ようやく初めて、必要とする。とすると、将軍二人が意見を同じくしていたならソクラテスの意見は必要なかった、ということだ。この、教育について多数決で決めること以外に方法がないと考える点で、彼らは間違っていた。彼らにとって教育が、多数決で決めることのできるような、誰の意見も同じ重みを持つような、簡単な企てであることが、多数決に訴えることにより明らかになってしまったのである。教育が重要であり必要なことは理解していても、スーパーでの買い物のように教育も簡単に購入できる、と人は考えてしまう。では、教育を行うことの難しさはどこから来るのか。引用に戻ろう。

メレシアス どうしてそうでないことがあるでしょう。

ソクラテス それでは今もまた、まず第一にまさにつぎのこと、すなわち、私たちがそれに関して思案している事柄について、我々のうちの誰かが専門的技術をもった者であるかどうかを考察しなければなりません。そしてもし、そういう人がいる場合には、それ以外の者は度外視して、その一人の人に従わなければなりませんし、もしそういう人がいない場合には、誰かほかの人を探さなければなりません。

それとも、あなたとリュシマコスさんは今、あなた方の財産のなかでもまさしく最大の所有物について危険を冒しているのではなく、取るに足らないことについて危険を冒しているに過ぎないとお思いでしょうか。というのも、息子たちがすぐれた者になるにせよ、それともその反対の者になるにせよ、その子どもたちがどのような人間になるかに応じて、その父親の一家全体が経営されることになるからです。

メレシアス あなたのおっしゃることは本当です。

ソクラテス そうだとすれば、我々はそのことについて、あらかじめ大いに配慮しなければなりません。

メレシアス まったくその通りです。

ソクラテス それではどのようにすれば私が今しがた言ったことについて考察することができるでしょう。つまり、もし私たちが体育に関して、我々のうちの誰がもっとも専門的な技術をもった者であるかを考察したいと思っただけの場合のことですが、それは体育を学んでそれを習得した人ではないでしょうか。そしてその人には、その科目そのものに関するすぐれた先生たちもいたような人ではないでしょうか。

メレシアス 少なくとも、私にはそう思われます。

ここでは、教育が重要なこととともに、教育者や教育アドバイザー（教育内容を定める、いわばカリキュラムを設定するひと）は「専門的技術(知識)」（教える当の事柄についての知識、スキル）を持っていなければならないことが述べられている。教育することの困難は、この知識の所持にある。そして教育者が**何を**知っておくべきかについての更なる考察が続く。

ソクラテス それではそれよりもさらに前に、それが何であるようなものの先生を私たちは探しているのでしょうか。

メレシアス それはどういう意味ですか。

ソクラテス おそらく次のように言えば、もっとはっきりすることでしょう。わたしには、そもそものはじめから、次のことが我々の間で同意されていないように見えるのです。すなわち、我々がそのことについて、我々のうちの誰が専門的技術をもった者であり、またその修得のために先生についていたことがあり、誰がそうではないかを思案している当の事柄はいったい何なのか、ということです。

ニキアス ソクラテス、我々は実際、重武装をして闘うことについて、はたして若者たちがそれを学ぶべきかどうかを考察しているのではないかね。

ソクラテス まったくその通りです、ニキアスさん。しかし、誰かが何か目に用いる薬について、それをつけるべきかどうかを考察しているとき、あなたはそのとき、その思案は薬に関するものだと思われませんか、それとも目に関してだと思われませんか。

ニキアス それは目に関してだと思う。

ソクラテス それでは、誰かが馬にくつわ轡をつけるべきかどうか、またどういうときにそうすべきかどうかについて考察しているときも、彼は馬について思案しているのであって、轡についてではないわけですね。

ニキアス その通り。

ソクラテス それでは一言で言えば、ある人が、あるもののために、あることを考察しているときには、その思案は、そのことのために彼が考察していたまさにその対象にかかわるものなのです。そしてそれは、何か他のもののためにそれを探求していたものに関する思案ではないのです。

ニキアス 必然的にそうなる。

ソクラテス そうだとすると、助言をする者についてもまた、我々がそのことのために考察するつもりで考察している当のものに対する配慮に関して、その人がはたして専門的技術をもっているかどうかを、考察しなければならないのです。

ニキアス まったくそうだ。

ソクラテス それでは我々は今、若者たちの心のために、学科について考察しているのだと主張するでしょうか。

ニキアス いかにも。

ソクラテス そうだとすると、我々のなかの誰かが心を世話することにかけて専門的技術をもった者であるかどうか、そしてそれについて立派に配慮することができるかどうか、また誰にすぐれた先生がいたか、その点について考察しなければなりません。

教育者、または教育アドバイザーは何について知っているべきか。目薬を目に適用する場合と、轡を馬に適用する場合が、重装武闘術を若者に適用する場合と比べられて、前者（目薬、轡、重装武闘術）ではなく後者（目、馬、若者）を、教育アドバイザー（と教育者）が知っているべきだ、となっている。この箇所は、ソクラテスが『ラケス』後半でラケスとニキアスに勇気の定義を求める根拠となることを考えると、以下に提出される教育者と教育アドバイザーの条件二つよりも、いっそう根本的な、教育者の条件を定めている。

人間の教育について述べる時、教育者が知らなければならないことは「若者たち」でなく「若者たちの心」となっている。上述の例二つ（目、馬）の場合にも「心」はなかった。ここで初めて「心」が付け加わる点は注目に値する。

ラケス それはどういうことか、ソクラテス。君はこれまで、いくつかの事柄に関しては、先生についたことはないのに先生についた者よりも技術的にすぐれた者を見たことはないのか。

ソクラテス 確かに私もあります、ラケスさん。しかしその人たちについても、たとえ彼らがすぐれた物のづくり手だと主張しても、もし彼らがよく仕上げられた彼ら自身の技術の成果を、一つまたそれ以上の数だけ、あなたに指し示すことができなければ、あなたは決して信じようとはされません。

ラケス そのことについては、君の言う通りだ。

ソクラテス そうだとすれば我々もまた、ラケスさん、ニキアスさん、——リュシマコスさんとメレシアスさんが二人して彼らの息子さんたちについて、彼らがその心に関してもっともすぐれた者となることを欲して我々を相談に招かれた以上は、——もし我々に先生がいると主張するのであれば、我々は彼らに対して、我々の先生を示さなければならないのです。その先生たちはとて、まず第一に、自らすぐれた者であると同時に、多くの若者の心の世話をしたことがあり、それからまた、我々を教えたことが誰の目にも明らかであるような人たちなのです。あるいは我々自身のうちの誰かが、自分には先生がいなかったけれども自分の作品はあると主張する場合には、——それが奴隷であれ、自由市民であれ、——衆目の一致して認めるところ、アテネ人もしくは外国人のうちの誰と誰が彼のおかげですぐれた者となったのかを言い、かつ示さなければならないのです。しかし、もし以上の何一つとして我々に自分のものとしてしめせるものがない場合には、ほかの人を探すように命じ、仲間の息子さんたちに関して、彼らを駄目にして、そのいちばんの身内の人たちから最大の責任を追求される危険を冒してはならないのです。

かくして教育アドバイザーの資格条件は

①立派な先生に教わったこと。（立派な先生は、(1) 自らすぐれた者であり〔有徳な人〕、(2) 多くの若者の心の世話をしたことがあり〔教育経験のある人〕、(3) 我々を教えたことが誰の目にも明らかであるような人たち〔教育実績を示すことができる人〕である。）

②教育実績を示すことができること。（後に出てくる言い方では、「ほかの誰の面倒を見られて、くだらない者から立派ですぐれた者とされた」ことの実例を挙げることができること。）

であるが、ソクラテスは両方の条件①②を自分は満たさない、と続ける。

この私はと言えば、リュシマコスさんとメレシアスさん、まず自分自身について申しますと、そのことに関して私に先生はいませんでした。実際、若い頃以来、ずっとそのことを欲してはいたのですが、しかし、ソフィストたちに報酬を払うことはできませんでした。彼らこそ、まさに自分たちだけが私を立派ですぐれた者にすることができると公言していたのですけれども、かといってまた、自分でその技術を発見することも今に至るまでできずにいるのです。

しかし、もしニキアスさんかラケスさんが、（ご自分で）発見されたか、学んだことがあるとしても、私はけっして驚かないでしょう。というのも、実際、財力の点でも私より力がおありですから、ほかの人から学ぶこともできたでしょうし、また年上でもいらっしゃるのです、すでに発見されたかとしても不思議はないからです。確かに、彼らは人を教育することができるものと私には思われます。というのも、もし彼らが十分知っている自分を信じておられなかったら、若者に有益な習いごとと有害な習いごとについて、自信をもって意見をお述べになることはけっしてなかったことでしょうか。そして少なくとも私としては、これ以外のことに関しては、この方たちを信頼しております。しかし、お二人がお互いに意見を異にしている<sup>6</sup>ことに、私は驚いたのです。

そこでリュシマコスさん、私はあなたに逆に次のことをお願いしたいのです。つまり、今しがた、ラケスさんがあなたに私を手放さず、尋ねるように命じられたのと同じように、私もあなたにラケスさんとニキアスさんを手放すことなく、次のように言って尋ねるようにお勧めしたいのです。すなわち、このソクラテスは問題になっている事柄に通じていないければ、あなた方のどちらが真実を語っておられるのかを判定する十分な力もないので、——というのも、ソクラテスはそうした事柄について、自分で発見したこともなければ、誰かの弟子であったこともないからなのですが——ラケスさんとニキアスさん、あなた方のそれぞれが、若者の養育に関してきわめてすぐれた誰かについたことがあるのか、また人から学んで知識をえているのか、それとも自分で発見されてなのか、そしてもし学んでだとすれば、それぞれにとっての先生は誰なのか、その先生たちと同じ技術をもった人にはほかにどんな人たちがいるのかを、おっしゃってください。それは、もし国事のためにあなた方にその暇がない場合には、私たちは彼らの所へ出かけて行き、私たちとあなた方の子どもたちがくだらない者になって、自分たちの先祖に恥ずかしく思うことにならないように、子どもたちの面倒を見てくれるよう、贈り物や感謝の言葉、あるいはその両方によって、彼らを説得するためです。

しかし、もしあなた方がご自分でそうしたことを発見されたのだとすれば、これまでにほかの誰の面倒を見られて、くだらない者から立派ですぐれた者とされた<sup>7</sup>か、その実例をあげてください<sup>8</sup>。

ここで述べられた教育アドバイザーならびに教育者は、教育内容と教育対象についての深い知識をもたなければならぬ。教育の困難は、教育者による知識所持の困難に由来する。では、それを知っている人がいないならば、教育は不可能となるのか。そうかもしれないが、知っている人がいないとしても可能な道徳教育もあり得るのではないかということをも第4章で考察したい。次章の第3章では、ソクラテスがここで述べた立場である、不知の自覚が、徳という大事なことを知らないと自覚することが、学習上の（したがって、教育上の）意義について考える。

だが、今、「学習上の（したがって、教育上の）意義」と書いたが、学習と教育、学ぶことと教えることとの関係について、言語に関連して、もう少し考察したい。

## (2) 学習、教育、言語

学ぶこと、学習があるところ、教えること、教育は必ずある。例外は母語を学ぶことだけだろう。ここには教育と言語の関係について面白い問題がある。

教育は、言語を用いて行われる。教育活動は、ほとんどすべて言語活動である。身体技術、たとえば野球の打撃技術、バットスイングの仕方を教える際も、適切なアドバイスが、学習者の目を開かせ、技術習得につながる。言語抜きでの教育は、その効果を大きく制限されると予想される。しかし、生まれた時、われわれは言語を用いることはできない。オギャーと生まれて「ハロー」といきなり話す赤子はいない。したがって、生まれ落ちたのち、言語は学ばなければならない。だがこの時、言語を用いて言語を教授することはできない。言語は未だ学ばれていないからだ。では言語はいかにして学ばれるのか。

子どもには高度な言語習得能力があり、適当な言語環境にいる限り、子どもは自ら言語を習得する。その能力は二つある。話されている言語で用いられている音を区別する力と、話されている言語の文法を見つける力である。これらは母語を習得してしまうと(習得してしまったから、かもしれない)、通常、失われる。

この能力は大変高度なものであり、教育を不要とするほどだ。(とはいえ、インスタントに学ぶわけではない。見方によっては、母語習得にこそ随分と時間と労力がかかると言える。)子どもは母語をひとりで学ぶのだ。すると、他に人間が学ばねばならないことについても、高度な学習能力さえあれば、教育はなくていいことになる。『ラケス』185eにも挙げられていた「自ら学んで知っている」ということが、知っておかねばならないことすべてに当てはまるような場合だ。

ここで現代イギリスの分析哲学者ギルバート・ライルの知見を導入しよう。その論文「考えることと自分に教えること」においてライルは次のように述べている<sup>9</sup>。考えることは自分の受けた教育の間隙を埋め合わせようという試みにほかならない。「思索することは教育の欠如を補おうとすることである。」すると思考は、一種の自己教育であり、教育不足を補うため、ひとは思考する。新しい知識、未だ知らないことを知るため、学ぶために、あるいは未だ知らないことを自らに教えるために、ひとは思考する。ただし、「考える人」は自分の知りたいことを自分で自分に教えている」わけではない。「彼はそのことを知らないのだから、それを教えることはできない。……「考える人」は可能な手がかり、糸口、示唆、叱咤、練習問題、刺激などを実験的に自分に浴びせかけているのであり、それらは自分の知っていることを他人に教える教師がときどき、あるいはしばしば、非実験的に用いるものと変わりが無い……。」すると、ライルの微妙な言い方を乱暴に言い直すと、思考は一種の自己教育であり、自己学習である。

言語以外のものを学ぶためにも自己学習能力、自己教育能力(ライルの言い方では、思考能力)を人間は持っている。その能力は、新しい知識の獲得能力、発見能力とも言える。しかし、新しい知識の獲得、発見には長大な時間がかかるのが普通だ。もし教育という手段に訴えずに、すでに先人が獲得した知識を、改めて、自分で発見、獲得するよう努力する場合、発見はもちろん可能だが、次の三つの問題点がある。

- ① 時間がかかる。一人の人間の時間が限られていることを考え合わせると、これは困る。他のことをする時間がなくなってしまう。
- ② 発見しても、それは人類全体に新しい知識を提供したことになる。ここでの想定では、それはすでに先人が発見したものだから、である。
- ③ 時間をかけたが発見できずに終わることもあるかもしれない。

したがって、教育(=文化・知識の伝達)なしに生きるのは個人にとっても社会的・人類的観点からも不効率すぎる、と言わなければならない。したがって、学ぶこと、学習があるところ、教えること、教育は必ず必要とされる。この必然性は、人間の学習能力不足による。

### 第3章 不知の自覚と、教育

さて『ラケス』後半において二人の将軍たちは勇気という徳について知らないことがソクラテスとの対話において示される。だが、徳について知っていることは教育者であることと教育アドバイザーであることとの資格条件だった。他方ソクラテス本人は、将軍たちと対話を始める前から、教育者であることと教育アドバイザーであることの資格が自分にはないと述べ

ていた。ソクラテスは徳について知らない。彼のいわゆる無知の知、不知の自覚である。本章では、プラトンのテキストから少し離れて、知らないと思うこと（不知の自覚）が、教育に関連してどのような意義を持つか、考察したい。

## (1) 「知らないこと」について

教育、道徳教育の基本的問題の一つに、「学習者に学習動機をいかにして与えるか」がある。学習動機を持つ人は学びたい、知りたいと考えている。学びたい、知りたいと思うのは、そこに問題があって解決を要求していると考えられるからだろう。それを解決するための知識が自分にはないので、知識を必要としているわけである。これを問題意識という言葉で言いなおすことができる<sup>10</sup>。

問題意識を持っている人は、そこに問題がある、解決されるべき状態がある、と意識している。そして、解決のためのアイデア・概念・知識を入手すべくアンテナを張りめぐらす。そうしたアイデア・概念・知識は未だ「知らないこと」である。この「知らないこと」は、問題の解決につながる大事なものだ。とはいえ、学ぶ者にはそれが大事だということは分からない。

その「知らないこと」は、教えられるべきこと、教育されること、教育内容、教育して学ぶ者に伝達されるもの、である。この「知らないこと」すなわち教育内容を、学ぶ者が未だ知らないのは、学ぶ者はそれをまだ知らないから学ぶわけなので、当然である。「その「知らないこと」が、知っておくべき重要事である」つまり「知らないことが大事だ」、と学ぶ者、教えられる者が信じるならば、学ぶ者は懸命に学ぶだろう。

だがここで、もう一つ「知らないこと」をめぐる注視しなければならないことがある。それは、学ぶ者である未だ無知なる者が、教育される事柄について、知らないという事態である。この、知らないこと（教育内容、教育されること）について、それが重要事であるにもかかわらず、知らないという事態、についても学習者は無自覚である。あるいは、すくなくともその事態に危機感を覚えてはいない。だが、知ろうと思うためには、自らが知らない、と、学ぶ者は自覚する必要がある。これはソクラテスの不知の自覚であるが、重要である。すでに知っている、わかっていると考えている限り、知ろうという気にはならないし、解決すべき問題があるとも考えず、すなわち問題意識も持つことはできないからだ<sup>11</sup>。

こうして学習者は、教育されること、すなわち教育内容について（確実に）知らないし、また教育内容について知らないという事態に（多くの場合）気づいていない。だが、学ぼう、知ろうと学ぶ者が考えるためには、知らないことはまずい、恥ずかしいと思う必要がある。そのように思うことが学習動機となる。では、学習者はいかにしてそのように考えるのか。

それには少なくとも二つの経路がある。（1）一つは、文化の代弁者、伝達者、つまり教育者が、大事だと権威をもって伝えるというやり方である。デュルケムは、教師の権威が生徒に学習動機を与える、と言う<sup>12</sup>。教師は、教職の偉大さを信じることで権威を身に纏う。学ぶ者が未だその価値を知らない、教えられること、教育内容が重要であることを学ぶ者が知る、あるいはそれに気づくのは、教師の持つ権威による<sup>13</sup>。（2）また、ここがわからないと困る、またここがわかるとこんなにも理解が進み、興味深い、と具体的に示すことも学習動機につながるだろう。学習者が開眼体験（単純な例は、ゲシュタルト心理学の、ウサギにもアヒルにも見えるウサギアヒルのような図を見ること）を持ち、理解が深まるならば、興味を覚えるだろう。

以上のように教育内容の重要性は、教師を通じて生徒に伝わる。「自分は知らない」という事態に気づくこと、「自分が知らないと思うこと」つまり不知の自覚を促すのは、もちろん、ソクラテスの論駁的対話（エレンコス）であるが、まずは「不知の自覚」にどのような意義があるかについて考えてみよう。



## (2) 「不知の自覚」の意義を考える

自分の考えは、それを自分の考えにした時点で、自分では正しいと思っている。誰も、間違っただけの考えをあえて自分の考えとはしない。自分の考えが間違っていると、その間違っただけの考えに基づいて、間違っただけの発言、行動するかもしれないからだ。にもかかわらず、自分の考えは自分の考えであるからといって、そのことで自動的に正しくなるわけではない。人間誰も間違っただけの有限な存在である。こうして、自分の考えのうち、実は間違っただけの考えも、正しさをもつと人は考えている。つまり、実は間違っただけの自分の考えは、正しさを偽装されたものとして自分には現れているのである。

しかし、自分の考えを正しいと思っている限り、それを改良したり、廃棄して別のよりよい考えに変えようとしたりすることはない。すでに正しい考えを所持しているから、それを変わると間違っただけになってしまうからである。たとえば、テストの答案返却時に、先生が「今日 僕は気分がいいから、返却した答案を書き直していいよ。それで採点しなおすから」と言ったとす（かなりおかしい先生ではある）。しかし百点満点の答案を返却されている生徒は、答案を書き換える機会が与えられても、変えたくない。変えると減点になるからだ。

とすると、正しいと偽装された自分の考えは、放っておくといつまでも残る。自分では正しいと思っているため、放棄する必要を感じないからだ。その間違っただけの考えを、正しい考えと、あるいは少なくともよりよい考えと交換することはない。自分の頭の中には既に正しいと偽装された考えが居座っているため、正しい考えが自分の頭に入っていくことができない。いわば、そのための空間、居場所がない。しかも、その間違っただけの正しいと思われている考えは、自分の頭の中でいわば放牧されているようなものである。それを自分で栄養を与えて養い育てているのである。

これは誤字の場合と同じような状況である。私たちは誤字を用いることがある。その時、自分では誤字だ間違っただけとは思っていない。正しいと思って使用している。すると、使用するたびに、この字で正しいんだ、と思っている。こうして使えば使うほど、誤字が正しい字だという記憶・認識は強化されていくことになる。

考えの場合の正誤は、誤字ほど明瞭ではないかもしれない。たとえば、利己主義の主張「人間は自己利益だけから行為する」が間違っただけであると気づくには、いくらか議論を必要とする<sup>14</sup>。

人間は有限であるから、不知の状態にあらざるを得ない。しかし、その有限性には、いわば裂け目、破れがある。不知を自覚する力、自らが有限だと知る力が人間にはあり、これが人間の有限性の大きさを小さくすることができる。未知の知へと探究に赴くのも知らないで自覚しているからだし、学ぼうと思うのも知らないで思うからだ。逆に言えば、知っていると考えている限り、未知の知へと探求に赴くことも、学ぼうと思うことも、ない<sup>15</sup>。

## 第4章 道徳教育の方法：『ラケス』199e-201c と『弁明』Ap. 39c-d

本章では、『ラケス』結末部 199e-201c と『弁明』最終演説 Ap. 39c-d から、ソクラテスの体現する道徳教育の方法について考えたい。

道徳教育の場合、正しい人は正しいことをすることによって、正しい人になる、とアリストテレスは言う<sup>16</sup>。正しいことを行うのは、正しい社会に育つことによってであり、周りの正しい人たちから影響されることを通じて、正しく行為することが習慣となる<sup>17</sup>。周りの人々に憧れること、優れた人をモデルにすることにより、人は人間的に成長する。これは、いわば背中による教育である<sup>18</sup>。

また、正しいことについての、言葉による理論的理解は、習慣を固める力をもつ。すると、言葉による理解を通じての道德教育が可能だと考えられる。とすると、次の二つの種類の道德教育の方法がある。

- ① 背中による教育
- ② 言葉による理解

①に関連するプラトンのテキストは、『ラケス』結末部分と『弁明』最終演説である。②は、あるいはすべての初期対話篇がその実例となっていると言えるかもしれない。

①についてソクラテスはどのように考えているか。『ラケス』終結部と、『弁明』最終演説を検討しよう。

### (1) 『ラケス』 199e-201c : 背中による教育. 共に探求者であること.

『ラケス』後半部において、ラケス、ニキアスの二人とも勇氣についてソクラテスを満足させるような説明を与えることはできなかった。二人はリュシマコスに、若者の教育について自分たちはお払い箱にして、ソクラテスをアドバイザーとするよう勧める。「そこでソクラテス、あなたとしてはどのようにおっしゃいますか。言うことを聞いてくださって、若者たちがもっともすぐれた者となるように積極的に協力していただけますか。」と尋ねるリュシマコスに対して、ソクラテスは言う。

ソクラテス　いかにも、それ、つまり誰かがもっともすぐれた者となるように積極的に協力しないということは、とんでもないことでしょう、リュシマコスさん。勿論、もし今しがたの対話において、私には知識があるのに、このお二人には知識がないということが明らかになっていたら、その仕事に私の協力を求めるのが至極当然だったことでしょう。ところが今や、私たちは皆同じように袋小路に入り込んでしまっているのです。そうだとすれば、一体、我々のうちの誰を優先的に選び出すことができましょう。私自身には、誰一人選び出すことはできないように思われます。そんな次第ですので、私が何かあなた方に助言することができるかどうか、一つ考えてみてください。

私としては、次のように主張したいと思うのです、皆さん。……我々全員が一緒に何よりもまず我々自身にとつてのできるだけすぐれた先生を探したうえで——実際、我々は必要としているのですから——、それから若者たちにも先生を探すようにすべきだということをです。お金にせよ、ほかの何にせよ、一つも惜しまずにですね。我々自身を今のような状態のままに放置しておくことは、私としては勧められません<sup>19</sup>。

ラケスにしてもニキアスにしても、またリュシマコスにしても、自分を論駁したソクラテスは知恵があると思っているけれども、ソクラテスは以前と変わらず自分は知らない、「私たちは皆同じように袋小路に入り込んでしまっている」と主張し、知らないままではいけないから、先生を、まず自分たちに、ついで若者たちに探すことを提案している。『弁明』最終演説においても同様の主張をソクラテスは行う。

### (2) 『弁明』 Ap. 39c-d 自分自身がすぐれたものとなるべく務めるべきだ、という主張.

『弁明』において、ソクラテスは有罪か無罪かを定める投票が行われ、ソクラテスは僅差で有罪とされた。ついで、告発者側は死刑を要求し、ソクラテスは罰金刑を申し出る。量刑に関する二度目の投票がなされ、今度は大差でソクラテスは死刑と決まった。判決後、ソクラテスは

告発者、有罪の投票をした人々、無罪の投票をした人々のそれぞれに対して演説する。ここで取り上げたいのは、有罪投票をした人々への言葉である。

さて、それでは、次には、わたしに有罪の投票をした諸君よ、諸君のために予言をしておきたいと思う。なぜなら、わたしも今すでに、人間が最もよく予言するときにあるからだ。つまりまさに死なんとする時にあたっているのです。わたしの言うことは、すなわちこういうことだ。諸君よ、諸君はわたしの死を決定したが、そのわたしの死後、間もなく諸君に懲罰が下されるだろう。それは諸君がわたしを死刑にしたのよりも、ゼウスに誓って、もっとずっとつらい刑罰となるだろう。なぜなら、いま諸君がこういうことをしたのは、生活の吟味を受けることから、解放されたいと思ったからだろう。しかし実際の結果は、わたしの主張を言わせてもらえば、多くはその反対となるだろう。諸君を吟味にかけ人間は、もっと多くなるだろう。彼らを今までわたしが引きとめていたので、諸君は気づかないでいたわけなのです。そして彼らは、若いから、それだけまた手ごわく、諸君もまたそれだけ、つらい思いをすることになるだろう。というのは、もし諸君が、人を殺すことによって、ひとが諸君の生き方の間違っていると思わされるのをやめさせようと思っているのなら、その考えは間違っている。なぜなら、そういう仕方では片づけるということは、立派なことでもないし、また完全にできることでもないのだ。むしろ他人を押さえつけるよりも、自分自身を、できるだけ善い人になるようにするほうが、はるかに立派で、ずっと容易なやり方なのです。さて、以上が、わたしに死刑の投票をした諸君に対する、わたしの予言なのであって、これでもうお別れです<sup>20</sup>。

軽々に人を殺すことで生き方の吟味を逃れようとするのではなく、自分自身がすぐれたものとなるべく務めるべきだ、と主張されている。さて、生き方について吟味を受けることは、受ける当人には苦しいことだ。自己反省能力を行使すること、自分自身の思考・発言・行動について熟考することは、自ら行うのも、他者に強いられるのも、面倒臭く、やめていいなら避けておきたいことである。しかし、不知の自覚について考察した時わかったように、そうしない限り人に進歩はないから、行うべきだ。したがって、吟味を強いるソクラテスを殺すことによって、吟味をなくすことは、よくない。「むしろ他人を押さえつけるよりも、自分自身を、できるだけ善い人になるようにするほうが、はるかに立派で、ずっと容易なやり方なのだ。」

ここで勧められているのは背中による教育というよりも、自己教育である。他人を教えようとする人は、他人に対して何かを押しつけるよりも、その人自身がよりよい人になることの方が立派で容易だ、と述べていると考えられる。ソクラテスを死刑にする、つまり殺すのは、他人を押さえつけること、他人に何かを教えること(ソクラテスの活動が間違っていることをソクラテスに教えること)の極端な場合というわけである。ソクラテスを有罪としたアテナイ人たちは、ソクラテスはいくら指導しても言うことを聞かない、こいつは殺さなければ分からない、と考えたとすると、彼らはソクラテスに分からせようとしていたのだし、これは教育の一種とみなすことも可能だ。このような教育は、確かに有害無益であると言わなければならない。

こう考えた場合、一種の逆説が生じてくる。つまり、教育は、先生・教育者が、生徒・教育されるものに教育を行うことであるのが普通なのだけれども、ソクラテスの考えによれば、教育を行う者は他人をではなく自分を教育すべきなのだ。そして教育は他者への押しつけとされる。すると、普通考えられている教育は、徳を身につけること、魂をより優れたものにする、すなわち道徳教育においては、なされない方がいいということになる。これはあまりに極端な話ではないか。

以上、『ラケス』『弁明』のテキストから何が言えるか。ソクラテスは、①背中による教育を積極的に主張していない。『ラケス』では、若者たちよりも自分たち(ソクラテス、ニキアス、ラケス、リュシマコス、メレシアス)に教育が必要であり、先生を求める必要があると言われている。また『弁明』からは、他人に何か(この場合は、死刑)を押しつけるよりも、自らがよりよい人になるべきことが分かる。

では、ソクラテスは背中による教育をしなかった、それを提唱しなかったということなのか。そうでもない私は考える。ソクラテスが真の徳の教師と呼べるなら、以下に述べる言葉

による教育, 論駁 (エレンコス) の方法 (the method of elenchus) と相まって, ソクラテス本人の人物による教育, 体現の方法 (the method of embodiment)<sup>21</sup>による教育, 背中による教育こそがその呼び名を支える, と考えられる。

### (3) 言葉による教育

②言葉による理解を通じての道德教育について少しだけ述べる。価値観における間違い, 掛け違いを正す試みの一事例として, 『ゴルギアス』の対話がある。また, 『弁明』には「生活の吟味」(39c)「諸君の生き方の正しくないことを非難している」(39d)とあるが, これはソクラテスの対話活動のことであり, 言葉による理解を通じての道德教育<sup>22</sup>ということができる。だが, 問題がある。ソクラテスは自分は教育者の資格を満たさないと述べていることだ。

しかし, ソクラテスが否定するのは, ソフィストたちのように, 金を貰って教えたことがあることであって, ソクラテスの活動が一種の教育になっていることではない。むしろ, 自らのライフワークとして自他の魂をよりよくすることに努めてきた, と言っているから, 他者の魂をよりよくすること, つまり道德教育を生涯の仕事としてきた, とソクラテスはその生涯の最後に (死刑判決を下される裁判において) 述べていると解釈できる。

だが, ソクラテス的対話篇を見る限り, こうした方法が効力をもたない場合も多い。対話相手が, やる気を失くすというか, ニヒリストになってしまうというか, 対話で話題になっていることから離れようとするとともに, 対話相手であるソクラテスを無視する態度に出るといえるか, そんな風になってしまうことは多い。だが言葉による価値観の立て直しが効力をもつ時もあるし, その効力が絶大である場合もなくはない。一般に, ソクラテスという人物の迫力の効果が絶大であることは, たとえば『饗宴』の酔漢アルキビアデスのソクラテス賛美演説で述べられている<sup>23</sup>。

### おわりに

第1章では『ソクラテスの弁明』19d-20cを扱い, (1)道德教育を何と考えるか, (2)何について教育するか, (3)どのような人が教育すべきか, といった問題がそこに現れていることを確認した。第2章では, 教育者ならびに教育アドバイザーの条件を『ラケス』184e-187aに基づいて考察し, 若者のところについて知識・技術をもつことがその条件であることが述べられた。第3章で教育における「不知の自覚」の意義を, 第4章で『ラケス』199e-201cと『弁明』Ap. 39c-dに基づいて道德教育の方法を, 考察した。徳についての探求的対話がソクラテスの哲学活動である。探求方法は論駁的対話 (エレンコス) であるが, これは言葉による理解を通じての道德教育と言える。このエレンコスと互いに支え合いながら教育効果を発揮するのが, 背中による教育, 体現の方法である。

残る問題は多いが, 一つだけ述べたい。ソクラテスは, 徳については誰も知っている人がいないと現状を判断する。それに対しプロタゴラス (とソフィストたち) は, 誰もが知っているかと判断する。(『プロタゴラス』320d-328d「大演説」) 彼らはこの点で対立している。だが, 教育は両者とも可能だとする。ソクラテスは自分は知らないから教育はできないとはっきり言っているけれども, 彼がある種の教育者であることは否定できないのではないかと。また, 両者とも教育が可能だとするならば, 彼らは教育に関しどの点で異なるのか。

## 註

[1]論文全体の目次を示す.

はじめに

第1章 『ソクラテスの弁明』19d-20cにおける道徳教育の諸問題

第2章 教育者の資格：『ラケス』184e-187a

第3章 不知の自覚と、教育

第4章 道徳教育の方法：『ラケス』199e-201c と『弁明』Ap. 39c-d

おわりに

[2]岩波プラトン全集1, 1986年, 57~58頁.

[3]現代日本において道徳教育は、教科化されたが、以前よりその指導要領並びに指導要領解説における「道徳」は極めて幅広いものである。「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」平成27年7月, 文部科学省 [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/10/1375633\\_8.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/08/10/1375633_8.pdf), 参照.

[4]不知の自覚は、道徳教育の前提となるとともに、その内容を規制する、とわたしは考える。第3章、第4章を参照。そもそも、道徳が何か、道徳をいかに教えればよいか、つまり道徳教育の理論と方法、について、定説は、ない。道徳については、Bernard Williams, *Ethics and Limit of Philosophy* 参照。背中による教育が、唯一可能な効果的道徳教育方法ではないか。道徳教育が不知の自覚なしに行われる場合、その害悪は大きい。教育が害悪を与えるのであれば、やらない方がいい、というか、行うことは禁止すべきだろう

[5]「もし君の息子がかりに仔馬や仔牛であったとするならば、彼らのために監督者となるものを見つけ出して」：仔馬、仔牛には監督者が必要だということが前提されている。人間と家畜の関係については、Harari, *Homo Deus* 参照。デュルケム『道徳教育論』での体罰についての章と考えあわせると、次のようになる。すなわち、監督者は監督対象を圧倒的に優越し、暴力を加えることを辞さない。人間の中での優越意識は劣等者への虐待を生じさせる。その実例として、大きくは、19世紀西洋の植民地主義、アメリカ征服、小さくは、新入生いじめをデュルケムは挙げている。この傾向性はイジメ問題の根深さを感じさせる。「道徳」の教科化などでは対策になりそうにない、と悲観的になってしまう。

[6]プラトン対話篇において、登場人物たちが意見を異にする場合を検討する必要がある。対立には三種類ある。(1)ソクラテスと対話相手。(2)対話相手Aと対話相手B。(3)ソクラテスと対話相手Aと対話相手B。(3)は三つ巴の場合である。

[7]「くだらない者から立派ですぐれた者とされた」という言い方は、よく言って率直な表現であり、剥き出しのまままで乱暴な感じを聞く人に与える。

[8]『ラケス』184e-187a

[9]ギルバート・ライル『思考について』坂本百大他訳, みすず書房, 1997, 所収。第4章「考えることと自分に教えること」信原幸広訳, 131-154頁。

[10]「問題意識がある」の英訳は, "have a critical mind" だが, ただ「批判的である」だけでは, どうしても, 批判者は自分の方がえらい, 批判対象よりも優れている, と(本人は気づかないうちに, かもしれないが)前提してしまっている。当事者意識がそこにはない。その問題の探求に自らも参加している, 当事者である, どうすればいいかを決めるのは自分である, 改善策を提案する, といった気持ちなしに, 批判だけしているのは, よくない。ソクラテスの「知らない」という態度は, そのようなある種の無責任な批判を行うことを, 人に禁じている。

[11]カール・R・ポパー『フレームワークの神話』ポパー哲学研究会訳, 「序言」14頁, 275頁など参照。

[12]『道徳教育論』264-266頁

[13]教育で難しいのは, 学習者に学習内容の重要性を感じてもらうことである。学ぶ者は, 学ぶことをなぜ学ぶべきかがわからない。学ぶ内容について知らないのだから, 知らないことについて, それが学ぶべき大切なことかどうかの判断は, できない。『メノン』におけるメノンのパラドックス, 『エウテュデモス』参照。

[14]ブラックバーン『ビーイング・グッド』§3参照。

[15]しかし, 知らないことである徳・道徳について探求は可能か。これは『メノン』における探求のパラドックスである。知らないことについては, 何を探したらいいかわからないから, 探求できないし, 万一探してそれに行き着いても, それが探求していたものだとわからない, というものだ。

[16]『ニコマコス倫理学』1105b10, 岩波アリストテレス全集1 5, 神崎繁訳, 75 頁.

[17]Dryden という詩人は, 'We first make our habits and then our habits make us.' と言っている. 「まずわれわれが習慣を作り, ついで習慣がわれわれを作る。」 (坂本訳)

[18]あまり指摘されることがないことだが, アリストテレスのアイデアを活かす, つまり彼の主張を道徳教育に適用する一つのやりかたとして, 現代の道徳教育の理論家であり道徳性心理学者であるローレンス・コールバーグによるジャスト・コミュニティの試みがある. A. ヒギンズ, 「アメリカの道徳教育」 岩佐信道訳.

[19]『ラケス』200e-201a, 80~84 頁.

[20]『弁明』39c-d, 108~109 頁.

[21]Robert Nozick, 'Socratic Puzzles', *Phronesis* 1995. Vol XI/2, p.155. 「われわれは魂の美が何かを, 明示的理論を提示されることによってでなく, ソクラテスの聞き手たちが学んだように, ソクラテスに遭遇することによって学ぶ. ソクラテスの教育とその圧倒的説得力は, ソクラテスが具現しているものと, それが表現される仕方に大きく依存している。」

[22]これは, 道徳は理性であるとデュルケムが言うとき, 意味されていてよいことだ. あるいは学習指導要領で「考える道徳」と言われているものでもあると思われる. 字面からすると, そう考えられると期待している.

[23]どの対話篇のどの箇所でもソクラテスの教育効果は示されているのか. (1)『アルキビアデス I』におけるアルキビアデスとの対話. しかし, アルキビアデスは, その後, 悪人となる. (2)『プロタゴラス』におけるヒポクラテスとの対話. こちらは, 『プロタゴラス』での対話の後, 若者ヒポクラテスがいかなる人生を送ったか, 不明である. ソクラテス裁判の陪審員・裁判官としてソクラテスに有罪票を入れたかもしれないし, 無罪票を入れたかもしれないし, また, プラトンのアカデメイアの協力者となったかもしれないし, 妨害者となったかもしれない. 一般に, ソクラテスが若い人々や友人たちと対話するときに, 彼の教育効果の実例となっているのではないかとはいえ, 若くない人々, すなわちソフィストたちや敵たち, 悪人たちと対話する際も, 何らかの仕方でソクラテスは対話相手に教育的影響を与えているかもしれない. ソクラテスの人格的影響力, 感化力は圧倒的だと考えられる.

## 参考文献

- アリストテレス『ニコマコス倫理学』, 岩波アリストテレス全集1 5, 神崎繁訳, 2014.  
コールバーグ, L., ヒギンズ, A., 「アメリカの道徳教育」, 『道徳性の発達と道徳教育』 岩佐信道訳, 麗澤大学出版会, 2014.  
坂本知宏, 「ソクラテスとカリクレス——エレンコスと『恥』」, 関西哲学会年報『アルケー』1994.  
坂本知宏, 「『ラケス』における知と勇気」, 神戸大学文学部『紀要』第24号, 1997.  
坂本知宏, 「ソクラテスの哲学活動について——神託解説、対話、魂への配慮」, 神戸大学文学部『紀要』第25号, 1998.  
坂本知宏, 「現代倫理学とソクラテス」, 大阪電気通信大学『人間科学研究』第5号, 2003.  
坂本知宏, 「『プロタゴラス』「大演説」の「道徳」」, 神戸大学哲学懇話会『愛知』第20号, 2008.  
デュルケム『道徳教育論』 麻生誠・山本健訳, 講談社学術文庫, 2010.  
ブラックバーン, サイモン『ビーイング・グッド: 倫理学入門』 坂本知宏・村上毅訳, 2003.  
プラトン『エウテュデモス』 岩波プラトン全集8, 山本光雄訳, 1987.  
プラトン『ソクラテスの弁明』 岩波プラトン全集1, 田中美知太郎訳, 1986.  
プラトン『メノン』 岩波プラトン全集9, 藤沢令夫訳, 1987.  
プラトン『ラケス』, 三島輝夫訳, 講談社学術文庫, 1997.  
ライル, ギルバート「考えることと自分に教えること」 信原幸広訳, 『思考について』 坂本百大他訳, みすず書房, 1997, 所収. 第4章, pp. 131-154.  
Durkheim, Émile, *L'Éducation morale*, Éditions Fabert, 2005.  
Harari, Yuval Noah, *Homo Deus*, Vintage, 2015.  
Nozick, Robert, 'Socratic Puzzles', *Phronesis* 1995. Vol XI/2.  
Williams, Bernard, *Ethics and Limit of Philosophy*, Harvard University Press, 1985.